# ペスタロッチー『幼児教育の書簡』における母性愛の構造

服　部　由美子
（広島大学大学院）

## 1. はじめに

ペスタロッチー教育学の中には，我々が継承していくべき重要な教育思想が多く含まれている。幼児教育における母性愛の重視もその一つであると言えよう。彼が全生涯，全著作を通じて，教育における母性の意義を高く評価していることは，既に指摘されている通りである。しかしまた，彼の母性観は，彼の他の教育思想と同様に，彼の生涯を通じて発展し続けている。ペスタロッチーは後になって，彼の理論のかなりの部分を撤回し，拡大し，深化しているのである。従って，ツアンダー (Zander, A) も言うように，彼の晩年の著作を取り上げて，彼の母性観を探究することは，真のペスタロッチーの「精神的遺産」（⑥－5）を継承する上で，意義深いことである。

本稿では，特に『幼児教育の書簡』(Letters on Early Education, adressed to J. P. Greaves., ESQ by Pestalozzi, 1827) を取り上げて，彼の母性観を考察する。この著作の中で，彼は他のどの著作よりも体系的，論理的に幼児教育論を展開している。(③－4）この著作の中で述べられているのは，幼児教育における母親と子どもの関係の重要性と，母性愛の重要性についてである。その中でも注目に値するのは，「次の世代の幸福を念ずる人は誰でも，母親たちの教育を最高目的として考える以上のことはなしえないのである。」（①－113）というペスタロッチーの言葉である。シルバー(Silber, K)が指摘するように，この著作で初めて，彼は女子教育の必要性について言明するのである。（⑧－185）この女子教育の内容を把握することは，彼における母性愛の構造を解明する上で，有益な示唆を与えるものだと考えられる。

本稿ではこの点に着目して，『幼児教育の書簡』における女子教育思想を分析することによって，母性愛の構造を解明する。まず，女子教育思想成立の背景を探り，続いて『幼児教育の書簡』における女子教育思想を分析する。

## 2. 女子教育思想成立の背景

ペスタロッチーにとって女子教育は，彼が教育研究を始めて以来の主要関心事の一つであった。（②－82）『ゲルトルートはいかにしてその子を教うるか』(Wie Gertrud ihre Kinder lehrt, 1801) において示されたように，彼の教育思想は後期において，環境的教育学と自律的教育学の二側面を統一するという課題をもつ。従って，彼においては「教育は自発的な内面的諸力を活動せしめなくてはならないのであり，そしてこのための技術」はつねに『自然の途』に結合されなくてはならない。」（⑦－52）すなわち，ここで「方法」の問題が現われてくるのである。

そして，シュプランガー (Spranger, E) も言うように，「後期になってペスタロッチーは，教育はすでに揺籃とともにはじまらねばならないということをかなり重視している。」（⑦－81）ペスタロッチーによれば，「私たちの〔ペスタロッチー達の〕改善された方法の適用の範囲を，幼児教育の段階にまで広げることができない限り，私たちの仕事が半分も達成されていると考えるべきではないし，そのことによって人類が得る利益の半分の成果も期待すべきではない。」（①－47）従って，我々は乳幼児期から「基礎教育」の方法を適用しなければならない。「だから，彼は人間陶冶の『技術的手段』を真に母親の手におこうとしたのである。」（⑦－81）ここで，乳幼児の教育者としての母親が重視されることになる。

ところで，その当時の女性たちは，ペスタロッチーにとってどのような存在だったのであろうか。彼は，『リーンハルトとゲルトルート』(Lienhard und Gertrud, 1781-1787) においては理想の女性を描き出した。しかし，今や彼は，『世俗の女性と母親』(Weltweib und Mutter, 1804) において，当時の女性達を批判する。この母性観の深化の背景に，マニュファクチュアの浸透という歴史的事実があることは否定できない。農業国スイスへの工業の進出は，人々の生活を著しく変化させた。人々は今や昔風の堅実な家政によってではなく，不安定な工場収入によって生計をたてるよう

になった。素朴な農民の家庭に，新しい都会風の習慣が入りこんできた。このような中で，家庭はもはや古い秩序を維持できなくなっていた。このような「文明の堕落を証拠だてているのは，とりわけ，真の母親にかわって，いわゆる『当代の女性』が出現していることである。」(⑦－51) 母親がかつて持っていた教育的機能は充分果たされなくなってきていた。しかし，このような中でも，彼は母親の教育力に期待する。ここから彼は，現実の母親に対する認識を深めるのである。

彼が，『世俗の女性と母親』で述べているように，現実の母親には二通りの型がある。それは，利己心に満ち，物欲に支配された世俗の母親と，賢明な母親である。ここで，彼は世俗的な母親を批判するにとどまらない。彼は母親の中に，二面性を見出だすのである。母親は純粋な愛情によって，子どもに教育的に働きかけることができると同時に，子どもを堕落させてしまう危険性をもつ。このような母親認識は，『幼児教育の書簡』においてさらに徹底される。彼は，母性愛の不足している母親の「怠惰と冷淡な無視」が，子どもを感性的，動物的方向に追いやるように，母性愛が過剰であっても，彼女は「際限のない甘やかし」によって，子どもを感性的な方向へ進めてしまう危険性をもつと考える。特に後者の場合は，母親の優しさや思いやりと勘違いされやすい。しかし，「真の情愛は全く異なる」(①－89) のである。母性愛に限りない教育力を見出だしてきた彼であるが，今や母親の本能的母性愛のもつ教育力に限界を見出だす。母性愛それ自体が教育的なのではない。教育的な母性愛であって，初めて教育的に作用しうるのである。彼が教育において重視している「母親の愛は，決して単なる本能ではない」(⑦－51) ということが認識される。そして，彼が母親に求めている真の教育的な愛のことを，彼は「思慮ある愛」という言葉で述べる。彼は，母親にこの「思慮ある愛」のみを期待したのである。(④－40) このような母性観の深化が，彼における女子教育思想成立の要因となるのである。では次に，この「思慮ある愛」の具体的内容について検討してみよう。

### 3. 「思慮ある愛」としての母性愛の構造

「思慮ある愛」としての母性愛は，『幼児教育の書簡』における女子教育思想の中に，具体的に示されている。彼によれば，あらゆる学校組織の中で最も有用なものは，「女性の特性が，幼児教育に顕著な役割を演じられるように，早くから発達させられている学校である。」(①－118) ここで，この女子教育のためには，「女性が完全に理解され十分に評価されることが必要」(①－118) である。この際，女性の理解は，優れた母親の観察から導き出されなければならない。では，優れた母親とは，いかなる母親のことを言うのであろうか。ここで，彼が述べる母親の本質的教育力に注目しなければならない。それは彼によれば，子どもの内に存する「愛と信仰の力」を発達させることである。彼によれば，「子どもには人間性のあらゆる能力が賦与されている。しかし，そのいずれもが発達していない－まだ開いていない蕾なのです。」(①－50) 従って，子どもの能力が，知的，道徳的，身体的の三側面に渡って発達しうるよう，我々は配慮しなければならない。しかし，ここで最初に，しかも完成された場合とほとんど同じ強さで発達してくるのは，愛と信仰の力である。乳児がまだ精神的にも身体的にも無力であるときに，既にこの愛と信仰の力は活動している。その最初の現われは，「微笑」である。微笑は，母親への愛の現われであり，人間の精神的本性の現われである。ペスタロッチーは微笑に，人間と動物とを全く区別する社会的な意味を与えるのである。では，この微笑が現われるためには，母親のどのような働きかけが必要とされるのだろうか。

ペスタロッチーによれば，それは親切な態度である。子どもの内に人間性を認め，それに働きかける母親の態度である。このような「母親の愛の表明，母親の善意の表明によって，母親は子どもへの彼女の最初の人格的影響を見てとることができる」(④－40) のである。母親の乳児への働きかけは，最初は必要の感情で満たされている。つまり，乳児の肉体的欲求の満足に向けられるのである。この母親の行為は，表面的には本能的であるように見えるかもしれない。実際，子どもの側からすれば，それは本能的欲求である。しかし，母親の側ではそれは決して本能的な働きかけではない。単に子どもの肉体的欲求を満足させるだけなら，動物の母親でも行うことができる。人間の母親が，他の動物の母親と区別されるのは，彼女の行為が子どもの精神的本性を助長するという点においてである。人間の精神的本性とは，彼によれば「他人の幸福のために自分の慰安や娯楽を犠牲にするという事実，個人の欲望をより高級な目的に従わせるという事実」(①－75) によって示される。すなわち，子どもに「克己」の力を形成するという点において，人間の母親の行為は動物の母親の行為から区別されるのである。そして，このことを達成するために，母親に必要とされることは，母親の愛をできるだけ強く働かせながら，しかもその行為においては思考によって愛を調節することである。(①－49) 従って，「子どもの教育は，母親の自己教育のための力を意志を前提とする。」(⑧－185) ここで，彼は女性の性格の特徴としての感情の優位を認める。

しかし，知的教育が女性の感情を弱め，女性の優しさを奪うという世間の見解は誤りだと考える。重要なことは，「精神力と心情力との調和がつくりだされ，そして育成されたすべての素質から，統一のある全体が形成されることである。」（⑧－185）つまり，「単純ではあるが，的確な行動基準となっている思慮分別と感情のほどよい混合」（①－118）を精神構造として形成することが必要となるのである。このことが，女子教育の課題として以下のことを導く。すなわち，「思慮分別をゆがめたり片寄せたりすることがおよそなく，感情を抑制することもおよそない両者のほどよい結合を頭の中に形成することが女子教育の重大問題」（①－118）となるのである。このことは，ペスタロッチーの意味での人間教育の課題を示しているものだと言えよう。実際，イヴェルドン女子学校で彼が行った女子教育は，その基本精神において，男子教育と何ら変わるところはなかった。（②－84）そして，イヴェルドン女子学校においては，「男子学校において男子に与えられたものと同じ教材が，女子に対しても与えられたのである。」（⑤－112）

以上のことからわかるように，「思慮ある愛」は性質上，本能的母性愛とは全く区別されるものである。ここにおいて，「本能的な母親の愛は，より高い，自立的な道徳的愛，つまり真の人間的なものによって完全にのり越えられているのである。」（⑦－77）しかしまた，本能的母性愛から「思慮ある愛」への移行が可能であることを，女子教育思想が示している。本能的母性愛は決して否定されるものではない。「思慮ある愛」は本能的母性愛を教育的に高めたものなのである。シュプランガーも言うように，「本能的な愛の『初歩点』のなかに，精神的なもの－『信仰と愛』－があらかじめ形どられ，包みこまれているのである。」（⑦－77）このように，人間の本能の中に精神性を見出だし，また逆に人間の精神性の中に本能的なものを見るという立場は，ペスタロッチーの人間把握の基本的立場である。この人間把握の立場が，母親に適用されたとき，ペスタロッチーは母性愛の中の二重性に目を向けることになる。我々はこの母性愛の構造を，「感覚精神的」，あるいは「精神感覚的」であると言うことができよう。我々はこのような母性愛の構造を，女子教育思想の中に見出だすことができる。

## 4. おわりに

以上述べてきたように，ペスタロッチーは母親の教育的意義を最後まで重視し続けるところから，女子教育の必要性を認識することになる。そして，彼の言う女子教育の内容は，決して育児だけが女性の天職であるとするような特性教育ではなく，感情と知性の調和をはかるという，ペスタロッチーの意味での人間教育であった。このように，彼が女子教育を人間教育として位置づけたことは，彼を時代から一歩も二歩も前進させている。ペスタロッチーの女子学校は，「ただフランス語でのみ話され，ふざけあいのなされているような〔当時の〕普通のスイスの寄宿学校とは異っていた。」（⑨－145）それは，女性を教育者にまで教育するものであった。そして，女子教育の結果として当然である女性の就労についても，彼は決して拒まなかったのである。（⑤－128）このことは，ペスタロッチーの女子教育思想が，優れて今日的な内容をもっていたことを示していると言えよう。ナトルプ（Natorp, P.）が言うように，「ペスタロッチーは，他の教育者には見出だされることが稀である意見，すなわち，婦人は人間である，全人である－少なくとも全人でありうるという意見を持っていたに相違ないのである。」（⑩－134）ここに，我々は，今日の男女平等教育の理念に匹敵する，ペスタロッチーの優れた見解を見出だすのである。

### 〈引用・参考文献〉


①Pestalozzi, J.H. ; Sämtliche Werke, Kritische Ausgabe, 26Bd. （以下，Kr.A と略す。）

②Pestalozzi, J. H. ; Zusatz, das Töchterinstitut betreffend, 1808. (in Kr. A21.)

③Pestalozzi, J. H ; Weltweib und Mutter, 1804..(in Kr. A16.)

④Schwarz, E. ; Das Verhältnis von Mutter und Kind nach Pestalozzi. (in : Kindergarten) Leipzig, 1927.

⑤Rappard, I, v.; Die Bedeutung der Mutter bei J. H. Pestalozzi, Bonn, 1961.

⑥Zander, A. ; Pestalozzis geistiges Testament, Heidelberg, 1952.

⑦Spranger, E. ; Pestalozzis Denkformen, Stuttgart, 1947. （吉本訳『教育の思考形式』（明治図書　1962.）

⑧Silber, K. ; Pestalozzi, Heidelberg, 1957. （前原訳『ペスタロッチー』岩波書店　1981.）

⑨Silber, K. ; Anna Pestalozzi-SchultheB, Berlin und Leipzig. 1932.

⑩Natorp. P.; Pestalozzi und die Frauenbildung, Leipzig. 1905. （福島訳『ペスタロッチーと女子教育』目黒書店，1929.）